



Natural Environment

豊かな自然と共生するまち



子どもたちがカブトムシを捕れるような森づくりをしていきたい。

NPO法人森の会 技術顧問
Ochiai Makoto
落合 誠



——「海辺の森」に取り組まれたきっかけは？

落合 最初のきっかけというのは、地球温暖化防止のために寄付を集めていたところから、新潟の海辺の森に木を植えてくださいという連絡がございまして、よしじゃあ、木を植えて、海辺の森を活性化させ、資源も活用していこうということ

を何とかやろうよということ、まだ1年もたつていません。日々進化しているという気もいたします。

——具体的にどのようなことに取り組んでいますか。

落合 バーベキューサイトを作ったり、ごみ箱にウッドボードを作ったり、資源の再利用ということでもり直しました。新しいものを使うよりも資源の再利用ということ

が、一つのキーワードになります。今までは20年間、あそこでは水の販売もありませんでした。

夏場の暑いときにかき水がないなどというキャンプ場はちよつとまくなよねと。じゃあかき水もおいてしまおうと。それで、今年の夏、手動のかき水器を買って、子どもたちとかき水大会を無料で行いました。子どもたちは大喜び、若いカブトムシも大喜びでした。外国の方も、ジャパニーズクラッシュアイスとか何とかわけの分からぬことを言っていましたけれども、非常に大喜びでございました。

また、朝摘みでミニトマト、賞味エリアという所を作りましたら、外国の方が「デリシヤス、デリシヤス」と

と言って大喜びしてくれました。そういうおもてなしの気持ちをとにかく出していききたいということ。それが功を奏しまして、今年是非常に天候が悪かったのですけれども9月30日現在で6088名の利用がございました。6000人のポーターラインは無事超えましたから、安心はしております。

新潟の新しい食文化ということ、本物のバーベキューサイトをオープンさせていただきまして、今後いろいろな顔を持ったサイトを作っていきたいと考えております。

その他にも、森の会の活動として森づくりに取り組んでいます。来

年以降、もつと頑張つてカブトムシの森を作っていこう、わんぱくの森をもつときれいにしていこうと。海辺

の森は松食い虫によって伐倒されて、大体30%くらいしか残っていないのではないのでしょうか。それで新たに植林しておりますけれども、ニセアカシアを何とかしていかなければならないということで、鉢台を作ったり、コースターを作ったりと、今度はコミュニティビジネスとして南浜の人たちと一緒になってやっ

ていこうと。今まではなかなかそういうところまで行き着かなかつたのだけれども、僕らの最終目標はそこにあります。ミニ門松を作ったり、アケビやフジなどつる性植物が

いっぱいありますから、リース材料の提供場所にしていったらどうかと。とにかくあまりいっぱいやっていくよりもコースター作りやミニ盆栽を定着させてから次のステップに進みたいと考えております。

——これなども作ったものを売ること、一緒に作るというやり方もありますよね。外から来てもらつて、体験型で。

落合 そうですね。もつと活用して、コケの採取や、松の採取から、そういうものから体験していただきたい。

保全活動もしながら、その中でこういうものを採取して作つていくという体験型の、しかも森の保全活動とうまく結びついたものができたらおもしろいと思うのです。

庄内海岸を9月30日に見せていただきました。本当にきれいなのですよ。本来はああいふ森でなければいけないなど。いろいろな説明も聞くことができ資料もいただきましたから、先進地の視察というの非常に勉強になりました。

——落合さんからは28年度の未来予想図の制作にも携わつていただきたい。これからの北区の将来像という

か、海辺の森というものも、北区の魅力の一つだと思つたので、これからの北区の未来像には、どうすけれども、北区の未来像には、どういったところがあつたらいいのか。それを後継者に託すとしても、どんなまちづくりを期待されますか。

落合 北区の将来像として、やはり北区の森は海辺の森しかないのです。一番大きな自然で、面積的にはやはり海辺の森なのです。あとはもつとあのロケーションを活用していただきたい。そのためにはあの



森をきれいにしたい。とにかくこの4年間で何とか林床整備をしたい。海辺の森は将来、活用できる一つのフィールドになつていけると思っています。

今年は第二展望塔の前の所に花壇を作りました。以前は弁当などのごみを捨てていく人たちがいましたけど、現在はあそこで活動しているおばちゃんたちが花を植え、除草しているのを見えていますから、だんだんよくなりつつありますよね。

これから私たちが目指すのは、森と林のすみ分けなのです。昨年、昨年、何万本と植樹しました。クロマツの純林ですから林を作つていかなければだめなのです。ところが混交林は森になります。さまざまな樹種が競合していますから、ですから、森づくりと林づくりという二本立てでいかなければいけませんよね。



ミニ盆栽作り

海辺の森も、道路から見えるところは全部見通しがよくて、奥のほうに行くと森になつていく。林があつて森があると。そういうすみ分けをした森にしたいなと思います。将来は森の中にもノイバラがなくなつて、子どもたちがカブトムシを捕れるような森づくりをしたい。それが海辺の森の本来のあるべき姿なのではないかと。



佐久間 将 Sakuma Susumu
NPO法人森の会 副理事長

「海辺の森」から地域づくり



海の森キャンプ場バーベキューサイト

海辺の森は20年ほど前には大掛かりな公共工事で延長4km、面積にして120haがきれいに整備され、大勢の人たちがウォーキングを楽しんだり、子ども連れの家族が無料で遊べるとしても人気のある場所でした。

しかし、あまりにも広大な面積であるが故に森や付帯の遊具、構築物などを守り切ることができずに荒廃が進み、行政も頭を抱えているのが現状です。

このような海辺の森を何とかしたいとの想いで平成28年度に私たちNPO法人森の会は、海辺の森の指定管理者にチャレンジしました。

現地での説明会を経て海辺の森のビジョンづくり、そして、厳しい審

査委員会でのプレゼンテーションと高いハードルを越えねばなりません。森の会メンバーは私を含め年配者が多く、財務内容も脆弱、経験無し。それでも諦めずにチャレンジしようと思つた背景には20年来活動を共にしてきた仲間たちがいたことです。海辺の森を知り尽くしビジョンを描く人、決めたらあつという間に実行する人、ボランティア精神あふれる地元企業主の皆さんがいたからです。

人生60年も生きていると実に様々な事が起きるものです。自分の暮らしの中で少しでも世の中のためになれば、との高邁な思いをもつて活動してきました。福島潟に木を植える会に端を発し20年を経過した認定NPO法人森の会は、北区の宝の一つ海辺の森の指定管理者となることができました。

現在は、キャンプ場周辺の整備はもとより新事業の手ぶらバーベキューサイト増設や最西部わんぱくの森の整備に力を入れていきます。

また、これも新しいチャレンジとして行政からご指導をいただき、地元南浜の海辺の森協議会との協働で「誇れる地域づくり」の二環であるコミュニケーションの運営にも携わっています。海辺の森の資源

である実生の松で作るミニ盆栽や、間伐したニセアカシアで作るコースター、笹や松の枝を使った門松などが成果品として北区の家庭にお目見えするのも間近かと思えます。

指定管理者となり半年が経過し、課題として明確になつてきたことは、運営原資の不足です。圧倒的な広さを持つ海辺の森を「また来たくなる森」にする事の難しさを実感しています。しかし、私たちが指定管理者として選ばれた最も大きな理由もここにあると思います。NPOの特質を活かした持続可能な海辺の森保全活動の仕組みを構築すること、未来を担う子どもたちに誇れる海辺の森を残すこと、さらには「住みたくなるまち北区」の原動力となること、私たちの目的です。



バーベキュー講習会



ひょうたん池(松浜の池)

だが、地元の養蜂家の方に分けていただいたハチミツで部員が生キャラメルを作り、地域のイベント「青空バザール」で販売し、皆さんに喜んでもらえたこともいい思い出です。

次に取り組んだことは、私が子どもの頃は入江になっていた、今は池になった「ひょうたん池」に貴重なトンボが生息しているとの話から、実際に調べてみようかと活動を始めたことで、活動は現在に至っています。

それまで、どんなトンボがいるのかも知らずにいましたが、いざ調べると普段見慣れている赤トンボなどと違う、オオモノサシトンボやイトトンボと呼ばれる種類が生息していることがわかりました。体長は大きくても5〜6cmで、目を凝らして見ないとわからないくらいのもので、トンボです。

新潟市が政令指定都市になり、各地域にコミュニティ協議会が作られ、その後、地元にある文化や自然に光を当てる目的で地元学部会が出来て、もう10年になるうとしていきます。我々松浜地区でも各部から集められたメンバーで活動してきました。

この池は生活排水なども入らないことで環境の変化が少なく、動物や植物の生育に適した条件が維持できている貴重な池だと思えます。トンボの他にメダカ、フナ、スズエビなども生息しており、我々としては今の環境を維持する活動を続けながら、地元小学校(3年生)や市民への観察会などを通じて、地域の宝としての「ひょうたん池」を理解してもらい、皆でこの池を守っていかねばならないと思っています。

松浜のオアシス「ひょうたん池」

松浜地区コミュニティ協議会 地元学部会部長

Murayama Kazuo **村山 和夫**



松木 保 Matsuki Tamotsu

NPO法人ねとつわーく福島潟 会員

福島潟の保全

水の駅「ビュー福島潟」の開設の趣旨には、福島潟の環境保全について、次のように述べています。

「私たちの自然概念は広く、潟の自然があるから絵が描け、歌が作れ、俳句が詠め、写真が撮れると考えている。自然科学系の人たちだけが自然保護を訴えるのではなく、芸術文化面からも自然の大切さを知ってもらい、関わってもらうことが福島潟の豊かな自然環境を保全するとともに、自然を活かした自然文化の活動拠点となるものと確信している」

私もより多くの人々が潟に関わることに賛成です。しかしながら自然そのものをどう捉えるか、潟の自然保全とは何か、正しい認識の元に環境保全を考えていかなければ、末梢的な問題や、関わる団体や個人の利益を優先する考えに陥りがちとなります。

私達の考える「福島潟の保全」は「潟の生物多様性の保全」です。生物多様性には、生態系・種・遺伝子の3つのレベルがあります。生態系を保全することは、そこに生息する多様な種を保全することになり、種を保全することは、遺伝子の多様性を守ることにつながります。また、多様な遺伝子の存在は、多様な種の生息につながり、そのことが豊かな生態系の保全をもたら

します。



水の駅「ビュー福島潟」(左)と潟来亭(右)

ここ20年間で生物の多様性の保全にとって望ましくない事例がいくつかみられました。

- ① 在来のニホンイシガメの減少と外来種(ミシシッピーアカミミガメ)の潟での繁殖
- ② 飼育されていたアイガモが潟に放たれ野生化
- ③ パス類、ブルーギルの増加
- ④ ハクチョウへの給餌
- ⑤ アメリカザリガニの大繁殖と水生植物への被害
- ⑥ 潟の中州の浸食と面積の減少
- ⑦ 潟内のヤナギの木減少
- ⑧ 潟内に生育していたヒシモドキヒツジグサの絶滅等々。

これからの潟の生物多様性を保全していくことが必要です。毎年実施のヨシ焼きによって、生態系が単純化、均一化し、生物多様性を阻害しているように思います。潟全面のヨシ焼きは止めて、10年に1回くらいになるよう部分焼きにすることを提案します。

先代の皆さんが植栽をした内陸側の保安林は、かつては行政で伐採などをしていましたが、予算の影響からか、次第に思うような管理が出来なくなり、さらにこの10年余りの間に、美しい松林のほとんどが松くい虫の被害に遭い、跡形もなく荒れ放題の状態になってしまいました。

現在は海岸林の松だけが残っている状態です。

海岸林は、海からの強風や飛砂から地域を守る大切な保安林です。

しかし、この海岸林もこれから先、しっかりと手を入れてやらないと荒れ放題になります。

今、私たちは地域の皆様、各団体のボランティアの方々のご協力をいただき、下草刈りやイバラなどの伐採を行い、海岸林を守る活動を継続しています。

また、北区からは下草刈りロボットを区内の企業とともに開発してもらい、現場で私たちと一緒に作業をしてもらっています。

下草刈りを続けていくことで、松くい虫被害の原因であるマツノマダラカミキリが少なくなり、被害の防止にもつながると思います。

海岸林を守る活動

海辺の森協議会 会長

Kanda Waichi **神田 和一**



渡辺 昌一 Watanabe Syouchi

株式会社カネス 代表取締役会長 / NPO法人森の会 顧問



区制施行10周年今後の活動



有志での育樹活動

私は現在、父故渡辺亮の日記を整理しています。

父は株式会社カネスの代表取締役社長及び会長として、仕事に一生懸命でした。その他にも郵便局協会の会長、簡保払込団体10団体の連合会長、豊栄ライオンズクラブ会長、レオクラブ委員長、豊栄市老連会長なども努めたほか、合併促進の会議にも参加をしたりと、様々な活動をしていました。

加えて、老人クラブ活動でアルミ缶収集を通じての寄付や、有志と豊栄総合体育館の草刈等のボランティア、修養団活動など、色々な団体に参加してボランティア精神で一生を捧げ、満93歳で逝去いたしました。

私も父をお手本として、平成11年に「NPO法人森の会」を立ち上げ、仲間と色々な緑化活動をし

ています。現在は国道7号線の道の駅とよさかでの育樹活動で剪定作業、樹木や草花球根の植樹活動、草取りや清掃などを実施し、法花鳥屋老人クラブや八幡クラブ有志の協力を得て毎月第2土曜日に育樹活動を行っています。

これらの活動は、国土交通省新潟国道事務所より許可をもらって活動していますが、年1回有志建設業者の協力で大掛かりな育樹活動も実施しています。

合併して北区になりましたが、島見浜近くに「海辺の森」という森があり、地元の方と海辺の森協議会というものを立ち上げ、NPO法人「森の会」も会員としてお手伝いをしています。

平成29年4月より新潟市からNPO法人森の会が指定管理をさせてもらう事になり、キャンプ場等々の管理をしています。

整備が出来た所から植樹などをしていきます。今まではあまり手を付けていなかった林床整備に力を入れて、カブトムシの森やキノコの森を作ろうと活動をしたり、ある二画にはワラビの育成地があったため、これをさらに広げて多くの方から楽しんでもらう様に計画中です。

又、管理棟近くにバーベキューコーナーを設け皆様から楽しんでもらう予定です。キャンプ場、バーベ



海辺の森キャンプ場

キューコーナーの整備、更には林床整備と、これからは植樹活動を続けて、カブトムシ、キノコの森などを拡大し、皆さんから楽しんでもらえるような「海辺の森」を作りたいと思っています。

以上のような活動が出来るのも、関係者の皆様の理解や手助けがあり、皆が一様に活動ができる様になったからです。今はボランティアが楽しく、安心して活動に没頭できています。

写真家の目で見た福島潟

写真家／JA新潟市職員

橋本 建男

Hashimoto Takeo



写真を始めたのは、もう30年以上も前のことです。早起きして福島潟の朝焼けを撮り、中央公民館（現在の豊栄地区公民館）で超々下手くそな個展を開いたことを思い出します。

それから数十年、潟の風景も様変わりしました。水の駅「ビュー福島潟」を始め、施設が整備されました。遊歩道を廻り、潟の自然を容易に楽しむことができるようになりました。

政令市となり

北区の誕生から早10年ということです。その間福島潟が何も変わらないうと、実は毎年変わっていることに気が付きます。写真を撮るときに貴重だった柳が何本も朽ちてなくなりまし

た。水生植物（特にヒシ）が異常繁殖し潟面を覆っています。絶滅危惧種「ガガブタ」の姿が見当たりません。

さらに、福島潟の宿命として、流



ひょうたん池(松浜の池)

入する十数本の河川から家庭ゴミが流れつき、風景写真としては非常に悩ましい状態です。毎春、クリーン作戦が実施されていますが、拾えど拾えどなくなるものではありません。「日本の自然百選」「オヒシクイの飛来数日本一」「北限のオニバス」など、福島潟を讃える言葉は数多く、この冠に恥じないように、美しい福島潟の自然を後世に伝えていきたいものです。

また、北区で括られたことで、松浜の「ひょうたん池」と周辺の砂浜も身近な被写体に加わりました。こちらも貴重な自然を残すものですが、年々砂が堆積しています。

福島潟にもひょうたん池にも、心無い一部の釣り人が外来魚（ブラックバス等）を放流し生態系を壊しています。美しい自然を護るには、人々の理解と行動が必要です。